E.SHIBUSAWA

［逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え］

text：渋澤 健

逆境の時こそ、力を尽くす

第7回 切り離せぬ戦争と経済

安倍晋三元首相が凶弾に倒れるという衝撃的な大事件で、私のように放心状態に陥った方々は少なくないでしょう。参議院選挙の終盤を迎えていたタイミングであったため、「民主主義の根幹を揺るがす」「民主主義への挑戦」という声が上がりましたが、もっと深いところで社会的基礎が腐食しているのではないでしょうか。

社会が、世の中が、分断されて孤立感に陥っている人々が増えている。立場や意見が異なると相手のことを尊重するおおらかさも失われている。経済が総額や平均で見て成長しても、時価総額が最高値を更新したとしても、このような状態では豊かさは実現できません。

ただ、あの時、同じ声が一斉に上がったことが印象強く残っています。選挙中にもかかわらず、与野党を問わず、安倍元首相への追悼の意を捧げ敬意を表する意思で一致しました。世界の首脳も追悼で心が一つになりました。

友好国からはもちろんのこと、ウクライナと共にロシア、台湾と共に中国からも。米国ではバイデン大統領やトランプ前大統領からも同じ声が上がりました。ほんの一瞬だけですが、世界が一つになった印象を得ました。その後、色々な報道がありますが、功績を残した日本のリーダーとして、改めて敬意を表し心よりご冥福をお祈りいたします。

しかし、安倍元首相が去った世の中の現状は深刻です。ウクライナ侵攻の結末は全く見えません。その中、ペロシ米下院議長の訪台で台湾海峡の緊迫感が一気に高まりました。ちょうど日本が、77年前に数えきれない尊ぶべき命が一瞬に失われたことをしのび、平和を世界に訴えようとしているタイミングでした。

今から110～120年ほど前。渋沢栄一は断言しました。

「平和の破れた暁に、わが国はあくまでも平和を希望したなれど、かの国が云々ゆえ、勢い止むを得ぬなどと、ただ己れを善くせんとするがごとき責任転嫁の弁解は、これすでに平和の敵である。真正の王道、真正の文明を主義とするならば、決して平和の破れるはずはないのである。」

（【渋沢栄一訓言集】国家と社会）

戦争とは政府同士の意思決定により始まります。ただ、国と国の争いの背景には経済圏の獲得があります。ということは、渋沢栄一が唱えたように、真正の王道、真正の文明の経済人に責任があります。

「自分らはなるべく政治界軍事界などがただ跋扈（ばっこ）せずに、実業界がなるべく力を張るように希望する、これはすなわち物を増殖する務めである」

（【論語と算盤】処世と信条）

放心状態のままでいる場合ではありません。